

学 界 報 告

〔学 会 名〕

33rd Annual Conference of the European Health Psychology Society (EHPS)

〔参加セッション名〕

Public health interventions to promote physical activity and healthy eating

〔発 表 題 目〕

観光資源を利用したパーキンソン病の人の QOL 調査

Intervention in the quality of life of persons with Parkinson's disease using tourism resources

〔大 会 期 間〕

2019年9月3日(火)～2019年9月7日(土)

〔開 催 場 所〕

クロアチア・ドゥブロヴニク

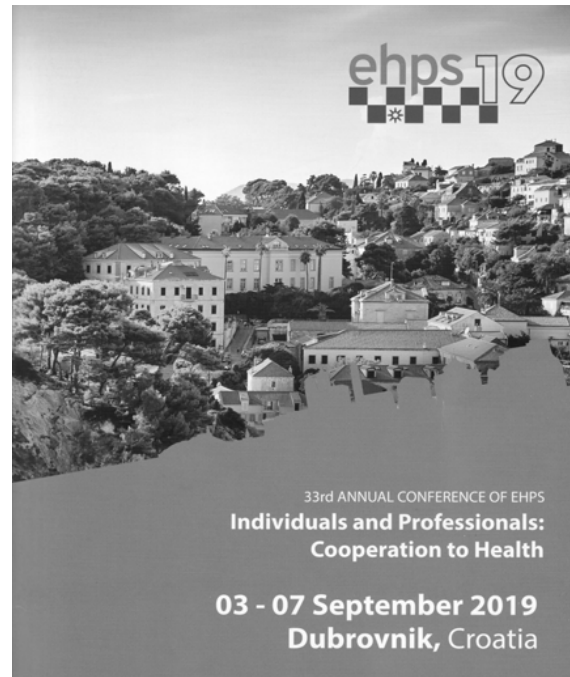
※記事

European Health Psychology Society(EHPS)は、ヨーロッパ圏での健康心理学に関する理論的研究や臨床応用、開発について、世界保健機関(WHO)が掲げる国際的な目標達成のため、世界中の健康心理学に関連する情報交換を促進するために設立された専門組織であり、例年、ヨーロッパ圏内において学術集会を開催している。第33回目の本年は、クロアチアのドゥブロヴニクにて行われた。

ドゥブロヴニクは、「アドリア海の真珠」と称賛される紺碧のアドリア海に隣接する城壁内の統一した配色の屋根瓦の美しい中世の旧市街地があり世界遺産に指定されている。

本年度のテーマは、Individuals and

Professionals: Cooperation to Health であり、ワークショップ、シンポジウム、ラウンドテーブル、最新の技術紹介、基調講演を含む学術集会が4日間開催され、参加者は約1000人であった。本会では、1000以上の抄録が投稿され、口頭発表275、ポスター発表394の演題が採択された。



EHPSは、国連と正式に提携しており、本年度は、Sustainable Development Goals(SDGs)；持続可能な開発および改善による世界中を健康にすることを目的とした演題内容を募集していた。投稿された演題の8割は、SDG3 “Good Health and Well-being” を選択し、約2割がSDG10 “Reduced Inequality” であり、以下にSDG4 “Quality Education”、SDG5 “Gender Equality”、SDG12 “Responsible Consumption and Production” であった。

Professor Rona Moss-Morris 氏の基調講演では、過敏性腸症候群に対する認知行動の自己管理として、18年間にわたり、対象者の日常生活について情報収集し、自己管理のため

の質問紙や介入に関するパイロットスタディを繰り返し続けてこられた経過と内容を紹介された。理論確立と実践に基づいた内容は、研究者として、また臨床家として科学的根拠に基づき継続することの忍耐、そして、医療や保健・福祉との協働による介入の重要性を示されていた。自己管理には、認知行動療法を取り入れた日常生活における行動変容により、過敏性腸症候群を伴う人の症状緩和を促し、さらに社会生活におけるストレスコントロールの必要性について強調されていた。このストレスコントロールは、この病気だけではなく、他の疾患や社会生活を送る上であらゆる人においても、同様にいえることであり、今後の私の研究にも取り入れていきたいと思った。

私は、「Public health interventions to promote physical activity and healthy eating.」のセッションにおいて、Intervention in the quality of life of persons with Parkinson's disease using tourism resources の題目で、観光資源を利用したパーキンソン病の人の QOL の調査について発表をおこなった。この研究の SDGs は、SDG3 “Good Health and Well-being” と SDG10 “Reduced Inequality” に該当する。内容は、パーキンソン病の人に対してウェルネスツーリズムを実施し、パーキンソン病の人の QOL への影響について実施後と 3 ヶ月後に調査をおこなった。ウェルネスツーリズム実施後のパーキンソン病の人の QOL は、QOL 質問紙に含まれる 8 項目；可動性・日常生活活動・情緒・羞恥心・社会的支え・認知・コミュニケーション・身体

的愁訴の各々のスコアは、改善 ($p < 0.05$) していた。さらに、3 ヶ月後には、抑うつ気分やパーキンソン病由来のストレスが、さらに軽減していた ($p < 0.05$)。また、聞き取り調査からは、外出頻度や家族との会話が増加した人や、病気や薬のことを医師と話すようになったと話す人もおり、旅行計画のために生活習慣を見直すといった日常生活に変化がみられた人もいた。観光資源の調査状況や変化では、世界遺産であるお寺の境内や石段にスロープや手すりが設置されており、環境に配慮されていた。日本の神社仏閣のトイレは、文化財保護の観点から改修工事が容易にできない状況であるが、和式様式から洋式化の工事の際に空間を確保し、手すりやオストメイト対応といった多機能トイレへとユニバーサルデザインを取り入れられていた。

本研究の結論として、観光資源を利用することは、当事者の健康状態や生活を見直す機会となり行動変容をおこすことだけではなく、その家族や観光資源を所有する場所・地域社会においてエンパワメントを高める機会になることを報告した。座長や聴衆者からは、本研究が当事者と地域社会の相互に影響し、世界遺産や文化財の環境保護に対する持続可能な取り組みであると評価を受けた。

また、一般人ではどうかという指摘も受けたことから、今後、広く対象者を検討していくことと同時に、観光資源を所有する地域社会と相互交流を進め、本研究を通して SDGs を引き続き実行していく必要があると思った。

(赤松 智子)